海外の話題

「ニューヨーク雑感」

農林中央金庫 ニューヨーク支店長 佐藤 典嗣

20 余年ぶりにニューヨークに再び駐在させていただく機会を頂き去る 7 月に着任した。ごく最近まで出張で頻繁に当地に足を運んではいたものの、いざ、改めてまた住んでみると、やはりこの 20 年の間にアメリカはずいぶん変わったと思う。とりとめもない雑感であるがいくつか印象を書きとめてみたい。

まずもって、ニューヨークは「おとなしい」街になった。1980 年代当時は犯罪むき出しのもっと荒削りの街で、夜の残業帰りには時折後ろを振り返りながら歩くといった、ある意味リスクを肌を感じながら生活していたものだ。しかし今では、犯罪率の低下に加え、当時は寄り付かなかったような地域もトレンドリーな再開発として生まれ変わるなど、当時の緊張感はなごやかさに取って代わられた。足元ではサブプライムの余波で景気の先行きを懸念する向きもあるが、20 年といったロングランで捉えれば、現在のこのようなニューヨークの「落ち着き」はまさに米国自らがグローバル経済の恩恵を十分に享受してきた結果であろうと思う。

一方で、これと対照的にセキュリティーを確保するための社会的コストも大きく上がった。保安検査はむしろ米国内の国内線のほうが厳しく、路線によっては日本への国際線よりもチェックインに時間がかかる。今日は国内出張だから、日本に行くより早く家を出なくては、といった具合だ。同様に、生活必需品である運転免許や社会保険番号を取るにも、その審査の過程で逐次移民局との確認が行われるため、20 年前と全く同じことをしているに過ぎないのにいたずらに時間だけがかかる。昔と比べると特に外国人が生活のインフラを整えるハードルは随所で明らかに高くなっており、本来、寛容を精神とするアメリカは皮肉にも随分「身構える国」になってしまった。やはりテロがいかにかこの国のありかたを歪めてしまったか、改めて認識させられる。

仕事に近いところでは、金融市場も大きく変わった。単にその制度や規制が大きく変わってきたというだけでなく、参加者が多様化しかつ大いに賢くなった。丁度 20 年前、ここでブラック・マンデーを見て、始めて「サーキット・ブレーカー」という言葉を耳にし、なるほどアメリカではこうした危機を梃子にして良い知恵が出るのだと感心した。今日の危機と比較すれば当時の「危機」は

極めて単純であり解決策もまた単純であったが、その後も危機はさまざまな形に「進化」して現れ、それに遭遇するたびに市場の知恵と抵抗力が蓄えられ、参加者が賢くなることでアメリカの金融市場がここまで強くなったと実感する。

他方、今日のように情報格差が縮小し判断のベースが似かよってくると、市場参加者が同じような考え方や方向感を持つことが増え、このアメリカですら市場観の同質化が進んだような気もする。今回のサブプライムでもそうだが、市場で何かが起きた時、さまざまな市場関係者がほぼ同時に同じようなコメントをすることが以前に較べて目立つようになった。最近の論調は、「蓋を開けてみればみんな同じ間違いをしていた」、というのがひとつの決まり文句のようだが、翻って、まさにしっかりとした独自の目線を持って仕事に当たることがこのうえなく大事な時代だということでもある。

この秋、アメリカはひとつのサイクルの節目を通過し、あらたなフェーズに入った。初心に帰って新鮮な目で向き合ってゆきたい。